



標高 2500m（河川からの比高 600m）の山頂に築かれた天空都市  
標高 3000～4000m にいくつかの遺跡があり、これらはインカ道（歩道）で結ばれている。本遺跡はその内の最大規模を誇り、現地ガイド（日本人）は最大 5000 人程度が居住していたという説を主張。赤道に近いことから、積雪があるのは標高 4000m 以上。



畑と住居跡：

ペルー観光において、本遺跡は圧倒的な収入源であり、アクセス道を含め、補修作業等が行われていた。



命がけの段々畑

木が茂っていなければ作業できないのでは…。現に、観光客の転落事故も発生している…

ちなみに、入場者数は時間帯毎に一定数以下となるよう規制されている。



あいにくの小雨が、幻想的な雰囲気醸し出していた。正面の山に上るルートもあるが、少し腰が引けそうである…



要塞説を裏付けるような建造物（広い土地がいくらでもあり、信仰か敵からの防御のため築いたものと思われる…）



敷地内にわずかな湧水があり、その一郭で地すべりが…

◎ナスカの地上絵（ペルー：2015.3.7）



宇宙人

ナスカ平原（砂漠）に描かれた地上絵を軽飛行機で観光．“宇宙人が描いた”などとの説に子供の頃から興味を抱いていたが，最初に山腹に描かれた地上絵をみせられて…



ほとんどが平地に画かれており，天（神）へのメッセージであることが分かる．  
円内は地上絵“手”．建物は観察塔．約 700 程度画かれているとのことであるが，ガイドなしでは見つけにくい（日本人が搭乗している場合，優先的に片言の日本語でガイドしてくれる）．  
中央に延びる道路はパンアメリカンハイウェイ（アラスカ～アルゼンチン：48000km？）．



砂漠地帯の低地に沿って農地が広がる.



砂漠とは砂だけかと思っていたが、むき出しの岩盤がひろがり、“砂や岩石の多い土地”と定義されていることを初めて知った.

◎イグアスの滝（ブラジル，アルゼンチン：2015.3.8,9）



ブラジル，アルゼンチン，パラグアイの国境に位置するイグアスの滝。遠く，ジャングルの中に滝壺からの白煙が見える。



玄武岩台地に刻まれた滝壺。延長4km，落差80m。滝の左がアルゼンチン，右がブラジル，遠方がパラグアイ。元来パラグアイの土地であったが，戦争を仕掛けたことでこれを失ったとのこと。



滝壺は少しずつ後退しているとのことであるが，上空からは退行性の断裂が認められる。（左がブラジル側で，滝の全容を眺めることができる。右のアルゼンチン側では，トロッコ列車と歩道橋を伝って最上部の滝壺を散策したり，船で滝壺に突入することができる）

（南米の農地について）

ペルーからブラジルへの空路，アルゼンチン？上空では視界いっぱいには広がる平坦な農地と，どこまでも続く一直線に延びる農道，その中に数個の農家（家屋）しかないことなど，英仏でみた以上の衝撃を受けた。ひょっとしたら日本移民が関わっているのでは思われたが・・・



初めてのヘリであったが、操縦は以外と簡単そうであり、運良く副操縦席？に座ることもできた。



百均で求めた雨カッパは着衣と同時に破れ、失笑を買ってしまった…  
数年前の座礁転覆事故を受けて、ほとんどの船長が右側の安全なところに行かないようであったが、腕を振って左の滝壺に行くよう挑発したら、本当に突っ込んでいった。  
南米の人はなんと楽しいことか…



ジャングルは“蒸し暑い”というイメージがあったが、30°前後の気温の割には苦に感じなかった。

ガイドは日本から移民した70才前後の人であった。ジャングルを切り開いて農地を造成したが3年間は収穫がなかったこと、連作ができない（肥料がない？）ため最後は牧場にするとのこと、四国ほどの広さの土地を得た人のこと、ワニなど食べるものには苦労しなかったこと、夏の暑さ対策として蛇を首に巻いて過ごしたこと、夜にはそれをおいしく頂いたことなど、ワイルドなお話を伺った。

Web上では移民同士の対立なども記載されており、大変な苦勞が忍ばれると共に、しばし考えさせられた。

ちなみに、ここではワニ、オオトカゲ（の子供）、アライグマなどを見ることができた。



ブラジル側のレストラン（天井のない合理的な建築のように思われた）。



バスのローマ字と日の丸：  
ペルー同様、どこでも厚遇されている印象を受けた。



ホテル玄関の花瓶：  
透明な器を利用した斬新な飾り付けが印象的・・・